2021 年6月 13 日 久宝教会 花の日子どもの日・教会創立記念礼拝
（聖霊降臨節第 4 主日礼拝）

メッセージ「あなたがたが地の塩、世の光」　　牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 5 章 13−16 節

「あなたがたは地の塩である」、また「あなたがたは世の光である」というこの聖書の言葉と、私が初めて出会ったのは、私がキリスト教学校に入った中学生の時でした。イエス様が語られたこの言葉を、学校では、10 代の中学生や高校生たちに対して語り、「あなたたちは、地の塩、世の光です」「地の塩、世の光となってください」と、在学中に何度も繰り返し聞かされた覚えがあります。そしてそれは多くのキリスト教学校でも、同じようではないかと想像しますし、また幅広い年齢層の人々が集う、教会においても、同じように語られて来たのではないかと思います。

そのように語られる「地の塩」「世の光」ですが、そもそもそれらは一体何のことを表しているのでしょうか。後半の「世の光」の方は、15 節にある「また、灯（ともしび）をともして升（ます）の下に置く者はいない。燭台（しょくだい）の上に置く。そうすれば、家にあるすべてのものを照らすのである」という説明は、具体的で分かりやすいように思います。現代でも停電の際や、電気のない山小屋に行った際などに、ろうそくの明かりなどを、どこに置くかと言うと、やっぱり机や箱の下ではなく、上に置きます。そのようにすることで、家の中にあるものが全て照らされる、というのは、私たちの実体験としても、よく分かることではないでしょうか。

しかし、では前半の「塩」の話は、どうでしょうか。13 節には「あなたがたは地の塩である」に続いて、「だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられようか。もはや、塩としての力を失い、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである」とありますが、これは一体何を言っているのでしょうか。日本は海に囲まれた島国なので、塩というと、海水から作る塩が一般的ですが、イエス様たちが歩まれたパレスチナ地方では、いわゆる「岩塩」が主流なのだそうです。今日では「岩塩」というと、採掘場から掘り出されて来た巨大な塩の結晶の塊を連想しますが、当時のパレスチナの庶民たちは、採掘場から掘り出されて来た「土の混じった塩」か、「塩の混じった土」かを、日常的には使っていたのではないかと考

えられています。

人々はその塩と土の塊から、白く光る塩の結晶をつまみ取ったり、削り取ったりして使用し、それらを使い終わった後に残った「塩気のなくなった塩」、「塩分が少しだけ混じった土の塊」は、もはや役に立たないものとして、家の外に捨てられたのだそうです。ですから、今から2000年前のパレスチナ地方の人々にとっては、このイエス様のたとえ話は、馴染みの深い日々の出来事だったのでしょう。

塩分は人間にとって不可欠なものですが、冷蔵庫もなければ、缶詰も、真空パックもない時代ですから、塩は食料を保存するのに、必要不可欠なものでした。ローマ帝国時代には、給料は塩で支払われたそうで、「塩」はラテン語で「サル」と言い、それが現代の「サラリー」の語源になったそうです。また「サラダ」という言葉も、野菜に塩を振りかけて食べたことから生まれたのだそうです。更に古代ユダヤには「世界はワインなしでも生きられるが、水なしでは生きられない。世界はコショウなしでも生きられるが、塩なしでは生きられない」という諺(ことわざ)があったそうで、そのことからも分かる通り、水と塩とは人の命に不可欠であるということは、昔から自明のことでした（山口里子『食べて味わう聖書の話』43頁）。

そんな大切な「塩」をたとえに持ち出して、イエス様は人々に「あなたがたは地の塩である」と言われました。それは「世界を照らす世の光」と併せて、この「地上における塩」、おいしく味付けをし、腐敗を防ぎ、命に不可欠な塩……。「あなたたちはそのような存在ですよ」と言われたわけです。何故なら、その目的は 16 節にありますが「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、天におられるあなたがたの父を崇(あが)めるようになるためである」ということです。

しかし、ここで改めて考えたいのは、「あなたがたは地の塩になりなさい。世の光になりなさい。何故なら、他の人々が天の父を崇(あが)めるためである」ということを、本当に歴史の中を歩まれたイエス様が言われたのだろうか、ということです。確かに、キリスト教学校に通う生徒たちや、教会の礼拝に集まる人たちに対しては、「あなたがたは地の塩、世の光になってください」と語ることは、その人たちを力づけ、動機づけ、方向づけるのだろうと思います。その日の食事に事欠くわけでもなく、学校

や職場や家庭に居場所がないわけではない人たちにとっては、それは意味のある言葉かもしれません。しかし、どこにも居場所がなく、その日の食事にすら困り、自分自身が神からも人からも見放され、見捨てられていると感じていた人たちにとっては、どうだったでしょうか。それこそ「そんなの関係ない。自分の知ったことではない」と思われたのではないでしょうか。

そもそも、この「マタイによる福音書」5 章から 7 章にまとめて記されている「山上の説教」は、誰に向けて語られたものだったのか、というと、それは直前の 4 章に記されている通り、「ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、さらにヨルダン川の向こう側からやって来た大勢の群衆」「いろいろな病気や痛みに苦しむ者、悪霊(あくれい)に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など」イエス様の所に連れて来られた「あらゆる病人」たちでした（4：24－25）。そのような人々に対して、イエス様は「あなたがたは、これからは心を入れ替えて、地の塩、世の光になりなさい。天の神様のために、社会に役立つ人になりなさい」と言ったのではありませんでした。今、既に、そのままで「あなたがたが、地の塩、世の光です」と言われました。

何の役にも立たないと見なされ、外に放り出され、道行く人々から踏み付けられている塩気の乏(とぼ)しい塩。升(ます)の下に置かれて、折角の光も遮(さえぎ)られて、ろくに見ることさえできなくされている灯(ともしび)……。それらはイエス様が語られたあらゆる病気のため、また宗教的なケガレや罪のため、貧しく小さくされていた人たちが、まさに日々に経験していたものでした。そのような人たちに対して、イエス様は「あなたがたが、地の塩、世の光です」と言われました。この世の価値基準とは異なり、神の国、イエス様の価値観では、弱く小さく、貧しくされている「あなたがたこそが、地の塩、世の光」なのだ、ということです。

今日も、最初に教会の創立記念礼拝として、久宝伝道所・日本コイノニア福祉会のために作詞・作曲されて、贈られたという賛美歌「埋もれた宝」を歌いました。1 節の歌詞には、「私が初めて来た時に、ここで宝を見つけたの、埋もれた宝を見つけたの。この喜びに夢をかけ、すべてを捨てて飛び込んだ」とありました。今から

62 年前、伝道所や無認可のベビーセンターの草創期のことを思うと、そこに携わられた方々というのは、本当に「すべてを捨てて」「すべてを賭けて」のことだったのだろうと想像します。イエス様から声をかけられた 4 人の漁師たちが、網も舟も家族も置いて、イエス様に従った（マタイ 4：19、22）姿も連想します。それは決して簡単なことではなかったでしょう。

けれども、私たちは自分が献げるものが大きければ大きい程、その見返りを求めてしまうということがあります。食事にしても、商品にしても、何かを購入する際に、例えば 100 円なら味が自分の好みでなかったり、品質に多少の不満があっても、「しょうがないか」で済ませられたとしても、それが 10,000 円ならそういうわけにはいかないのではないでしょうか。しかし、よくよく考えて見ますと、両者の間にあるのは金額の違いだけで、本質的にはどちらも同じなのではないでしょうか。

教会の伝道についても同様です。これまでは「私たちは、地の塩、世の光です」。神様からの愛、恵みを知った者として、まだ神様を知らない、神様に気付いていない人たちに、神様のことを伝え、教えて差し上げましょう。そのために自分の全てを賭けて、全てを献げて来ました……。そのような歩みが、素晴らしい生き方であると繰り返し語られ、またそれぞれの人の中でも自覚されて来たのではないかと思います。しかし、イエス様は網も舟も家族も置いて来た弟子たち、「自分は全てを捨てて従って来たんだぞ」という弟子たちに対して、容赦なく「あなたたちには、小さなからし種一粒ほどの信仰もないじゃないか」（マタイ 17：20）と言われました。

大切なことは、どれだけ沢山のものを献げたか、ということではなく、イエス様の心、価値観・価値基準を、自分自身のものとして生きているかということではないでしょうか。「私たちは、地の塩、世の光です」と言って、上から目線で「教えてあげよう」「分けてあげよう」という姿勢で接するのではなく、むしろ私たちの目の前にいる相手を、「あなた方が、地の塩、世の光です」と言って、大切にする。それが本当の意味で、イエス様に従って歩むということなのではないかと思います。

まだまだ続くコロナ禍の中、格差と貧困は拡大し続けています。そんな時代の中、私たちは「あなた方が、地の塩、世の光です」と言われるイエス様と共に、今日もここから歩んで行きます。